



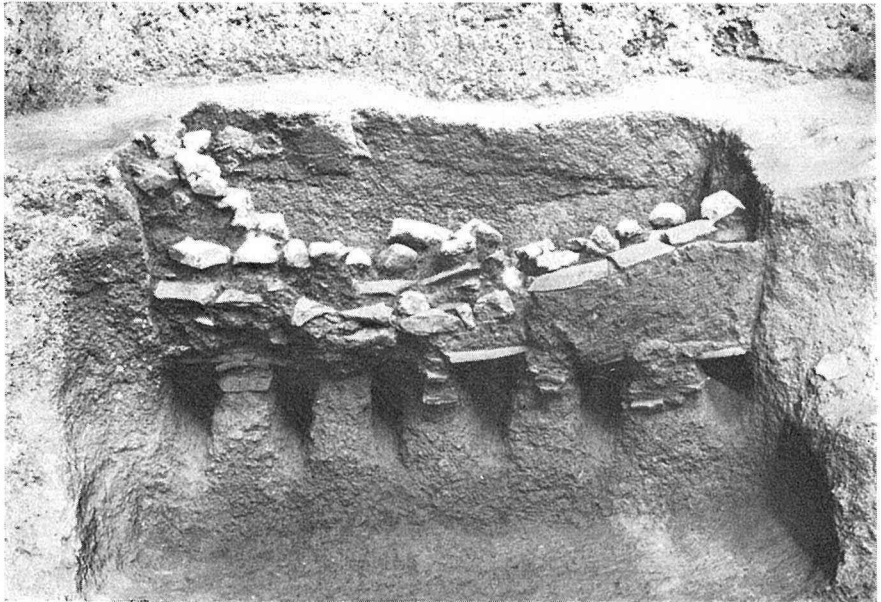
第一 図



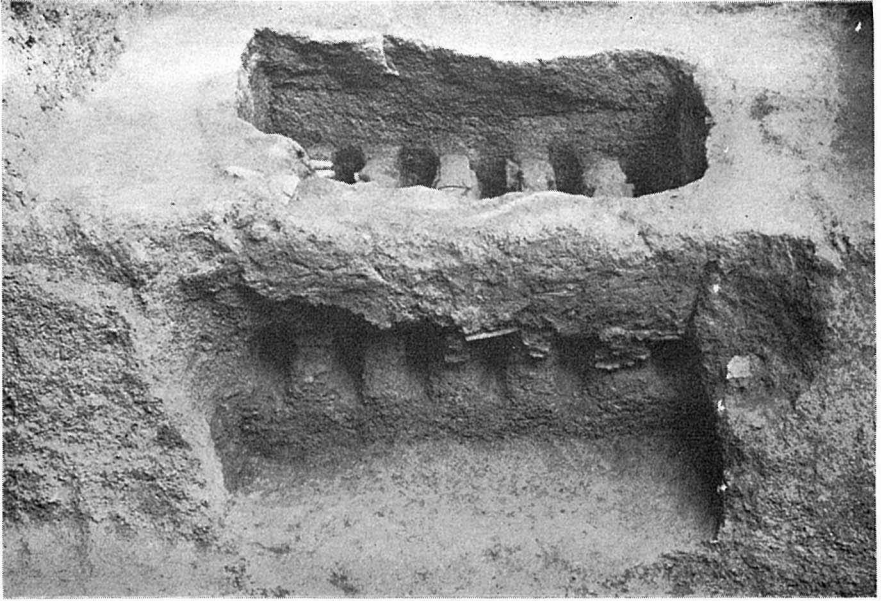
第二 図



第三图



第四图



第 五 图



第 六 图

# 奥海印寺瓦窯跡発掘調査概報

吉本堯俊  
桑山正進  
中村徹也

## I 位置とその周辺

奥海印寺瓦窯跡は、京阪神急行電鉄長岡天神駅の西北西約二kmの狭小な谷に臨む丘陵の西斜面の孟宗畑中、京都府乙訓郡長岡町字奥海印寺小字奥ノ院にある。この遺跡の存在する乙訓郡には、弥生式時代をはじめ、それ以後の各時代の遺跡が数多く存在しているが、特に古墳の群在をもつて知られ、この瓦窯跡の北に接する丘陵上、直線距離にして約四百mの山頂には長法寺南原古墳があり、また南に接する丘陵上の走田神社に至る間にも後期の古墳群が存在する。なお走田神社裏山より、四一年夏、陶棺が採集さ

れている。さらに時代がくだったては、旧乙訓寺・壱原麿寺・宝善堤院・海印寺などが建立され、長岡京の造営が行なわれたのも、またこの地である。

奥海印寺小字奥ノ院は、弘仁十年（八一九）勅許を得て木上山の小丘上に創建された海印寺の寺域内にあり、小字奥ノ院は寺伝に云う「奥の院」のあったあたりと推定される。その海印寺も応仁の乱で焼失し、現在は寂照院一坊を残すのみである。寂照院の背後に式内社といわれる走田神社があるが、当時の式内社妙見宮がこれにあたるかどうかには異論がある。窯跡付近の田畑は小字中ノ坊などの地名を残しており、窯跡を含む一帯の地が海印寺の

寺域であることを示している。

## Ⅱ 調査に至るまでの経過

このあたりに瓦窯跡が存在することは、以前より知られていた

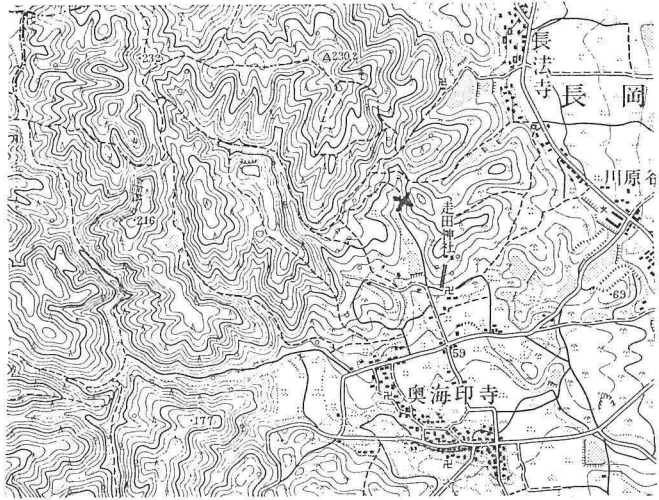


図1 瓦窯所在地（×印）

のであるが、四一年五月に長岡中学校生徒がこの地から採集した軒瓦片を、同校広瀬滋教諭を経て、旧乙訓寺跡発掘中の中山修一氏に示し、同氏が現地へ同行して、採集地点を瓦窯跡と推定した。

八月初め、旧乙訓寺跡の発掘調査の終了をまって京都大学大学院生吉本堯俊・桑山正進らは現地におもむき、散乱していた瓦片を採集。さらに清掃した結果、瓦窯は燃焼室の大部分を失なっていたが、隔壁の通煙孔が確認され、焼成室が残存している平窯であることがわかった。そこで再び土砂で被覆保護し、その後の対策を改めて検討することとした。この際採集した瓦片は燃焼室と思われる付近にほぼかたまり、中には軒平瓦片・軒丸瓦片も混っていた。

その後、文部省文化財保護委員会の指示を仰ぎ、府教育委員会と共に土地所有者と遺跡保存について話し合った結果、この遺跡が前述のごとく孟宗畑の中央に位置し、四二年度のたけのこ収穫のため四一年中にも

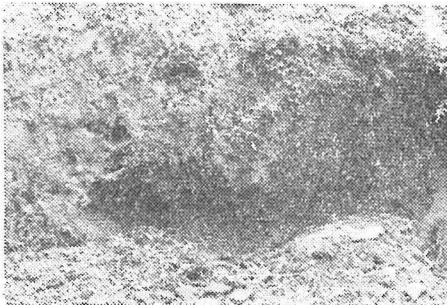


図2 遺跡発見時の状態

遺跡の範圍を含む区画の「土もち」を行なわねばならずこの部分のみの現状保存が極めて困難であるという結論となった。そこで京都大学文学部考古学研究室が調査にあたることとなり、四一年九月二八日より発掘調査にとりかかり、十月三一日に発掘を終了した。

調査主体 京都大学文学部考古学研究室

調査主任 京都大学教授 有光 教一

調査担当者 吉本堯俊・桑山正進・中村徹也・その他研究室学生

調査協力者 土地所有者 安井 専次

タキイ河陽農場主任 梅原 文雄

西京商業高校教諭 中山 修一

乙訓文化を守る会 小林 清

長岡中学校教諭 広瀬 滋

(敬称略)

### Ⅲ 構造

平窯の発掘調査が近年各地で行なわれているが、ほぼ完全形で残存しているものがきわめて少く、平窯全体の構造が明らかになつた例は過去の調査においてもまれである。

この瓦窯も燃焼室を失い焼成室と隔壁とが残っているだけである。従つて、この調査における目標として、残存部の構造だけでも詳細に調査することとした。

まず焼成室が残存している側に東西約二・六m、南北約三・五mのトレンチ区画を定め発掘を開始。地表下約八〇cmで残存している焼成室遺構に到達。この間には焼成室上部遺構の断片とみられる焼土や石塊やスサ混りの焼けた粘土塊が攪乱された状態で出土。さらに焼成室内を掘り下げた結果、予想していたよりはるかに少量の瓦片が無秩序に出土、その下に五条のロストルが現われたが、その上面には窯詰め状態に配列された瓦はなかった。出土する瓦片の中には軒瓦がみられる。ロストル上面には土師器(完形のもの二個を含む壺、重なつた状態の皿六枚以上)が出土している。

燃焼室を掘り進めていくと、ロストル・燂道溝・通燂孔及び隔壁の各部分の残存状態が良好であることがわかった。しかし残存している部分では煙出しに相当する施設は見当らなかった。

次に、構築過程を追いつながら各部分の構造について述べてゆくことにする。

まず焼成室は、表土下にある二層の地山のうちの上層の黄褐色粘質土層を切り込んで、下層の堅くしまった灰褐色砂礫層に及び、

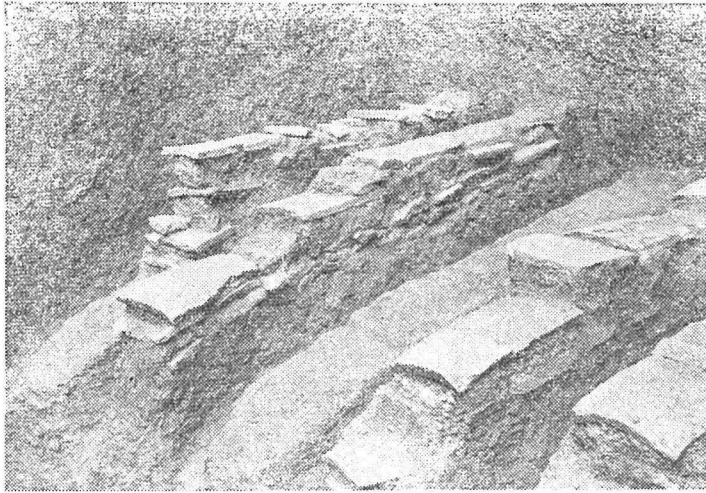


図3 ロ ス ト ル 構 成

さらにこれを掘り込んで底面を畝状につくりロストルの基底部にあてている。焼成室奥壁及び両側壁は切りこんだ地山をそのままあてており、奥壁の残っている部分の高さは焔道溝の底より八〇

cm、両側壁の残っている部分の高さは九〇cmあった。ロストルが奥壁に接するところでは地山を掘り残して奥壁より小突起を作り出しているが、これは基底部に、粘土と瓦とを交互に重ねてロストルを築くため、その高さを規定しているものと思われる（口絵一）。ロストルの構造は、今述べたように、一三cmの地山を掘り残した畝状の基底部の上に、粘土と瓦とを交互に積み重ねて作られており、その間の瓦は四重であり、大部分は長辺を連ねて並べられた平瓦片である。ロストルの上面と両側面は粘土で被覆されている。ロストル上面はほぼ水平であるが、焔道溝が奥壁に向って約一〇度の傾斜をもって高くなっているため、ロストルの高さは奥壁に近づくにつれて低くなり、奥壁に接する部分で一五cm、隔壁に接する部分では二五cmを測る。しかし幅は一定しており、ほぼ二〇cmである。六条の焔道溝の幅もほぼ二〇cmであり、両者はほとんど均等につくられている（口絵二）。

U字型の焔通孔もまた地山を掘り込んで作られ、約二〇度の急傾斜で焼成室へ向い、焔が勢いよく焔道溝にすい込まれるように作られている。焔通孔上には二列ないし三列の平瓦を三重に横方向に架し、その上に隔壁が築かれている（口絵三）。

隔壁の構造は内部に瓦片と拳大の石塊と土とを詰めて芯として、これを両側からはさむように厚さ一〇cmのスサ混りの粘土を塗っ



図5 隔壁内文様瓦出土状態

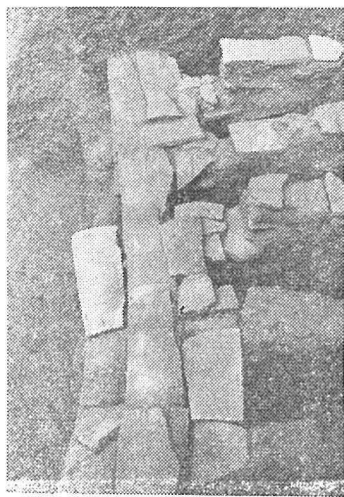


図4 焰通孔上平瓦構築状態

て築いている。

芯として用いられた石塊はこの窯付近の山石である。また瓦片は主に平瓦の破片であるが、なかには破損した軒平瓦・軒丸瓦もみられ、特にそれらは隔壁上端部に使用されているところから、隔壁の部分補修の際、補強材として用いられたものであろう。この構造からみて、かなり堅固に隔壁が築かれていることがわかる。高さは焼成室側では、四二cm、燃焼室側では隔壁面が燃焼室の奥壁ということになり、燃焼室の床面より焰通孔の底まで二五cm、焰通孔の縦幅三二cm、隔壁の残存している部分の高さ四三cmである。隔壁の厚さは上部で四五cm、下部にゆくにつれ厚みを増して、下部の厚さは五〇cmとなる。隔壁の構造が細部まで明らかになったことは、この調査の一つの成果であった(口絵四)。

前述したように、焼成室上方の攪乱土中から焼けた石塊やサ混りの粘土が出て来たが、これらは焼成室上半部及び天井部の断片である。これらの断片と、残存する奥壁に認められる僅かな内彎状態より考え、おそらく瓦を焼成する際、そのたびごとにサ混りの粘土をもってドーム状の天井を架し、中央部に穴を残してそこを石塊でもって覆い、煙出しとしていたことが考えられる。

燃焼室は殆んど削り取られて残ってはいなかったが、僅かに隔壁に直角の両側壁がみとめられた。床面も隔壁の下の部分におい



て薄く黒い灰層が残っていた。これらの部分より、燃焼室も地山を穿ち段を設けて作られていることがわかったのである。

土地所有者によると、灰原あたりから出土したかなり多くの瓦

を、農道の下を固める際に埋めたとのことであり、おそらく灰原は消滅したと思われる。

以上により、この平窯は丘陵斜面の地山を掘り込み、その堅い

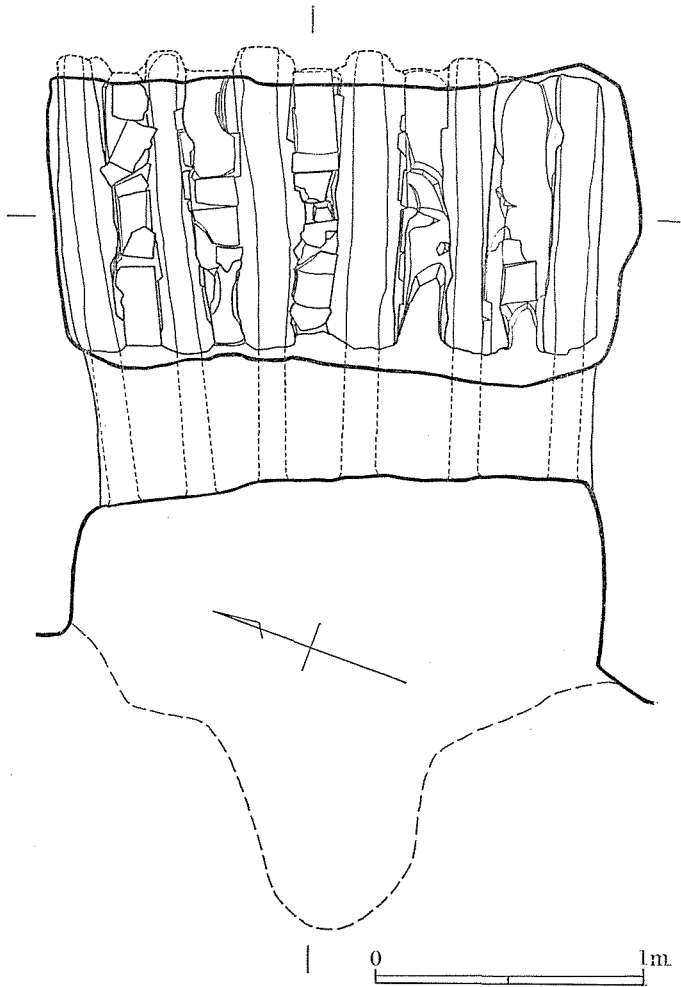


図6 平面図

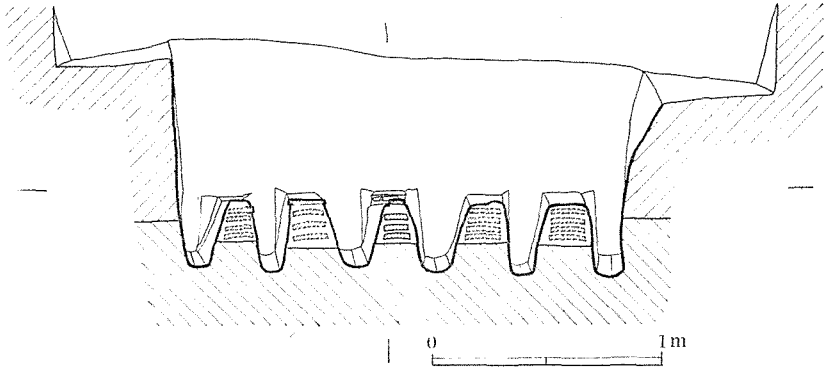


図7 焼成室横断面図

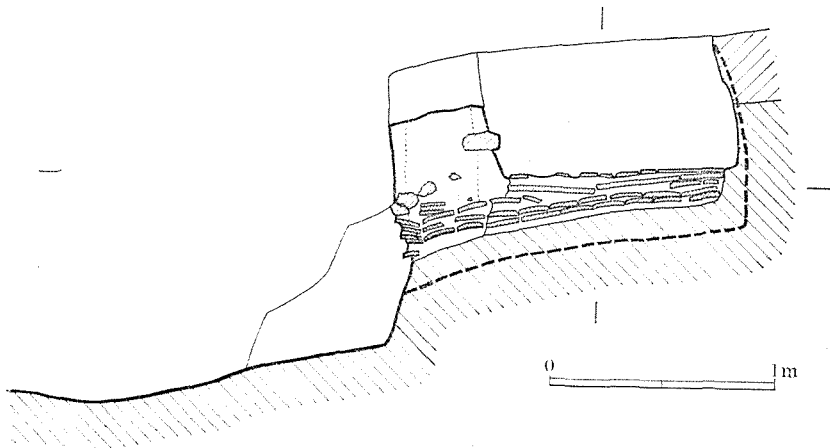


図8 中央ロストル継断面

地山を巧みに利用して窯の下半部を築成したものである(口絵五)。

#### IV 遺物

この窯より出土した遺物としては、瓦と土師器がある。

瓦に関しては、発掘調査前に長岡中学生が採集したもの、発掘前の遺跡確認の際採集したもの、今回の発掘調査で焼成室内から出土したものがある。燃焼室側で採集した瓦の量は非常に多かったが、これはこの窯を放棄する際に燃焼室を瓦の遺棄する場所としたか、あるいは後世「土もち」の際、ここに集められたものかいずれの場合も考えられるが、後者の方が可能性は強いように思われる。これらのほかに、瓦窯の構築素材として使用されているものがある。

しかし、特にここでは、整理の済んだ軒平瓦・軒丸瓦についてふれるにとどめておきたい。

土師器に関しては、前にも述べたようにロストル面上に散乱していたもの以外にはみられなかった。

(A) 瓦類

文様瓦としては、軒丸瓦と軒平瓦の二種が出土したが、共に燃焼室・焼成室・隔壁内から出土したものである。共に粘土は良質のものとはいいいにくく、この窯付近で調達したものであろう。砂粒をわずかに混じており、焼成はかなり悪く、色調は淡黄褐色である。

(a) 軒丸瓦 (五片)

いずれも蓮花文で、同范で作られている。直径一六cm。外区は周縁幅一・三cmで素文。珠文帯の幅は一・五cmで珠文の数は十二個。内区の直径一〇・五cm。複弁四弁で双蓮のもりあがり部分が鋭いY字型を呈しているのが顕著な特徴であり、他に出土したものと同范であることの手懸りとなった。間弁は三味線撥形で稜線は鋭くY字型を呈する。界線は花卉に接していない。中房の径三・七cm。蓮子数五個。文様は平安時代初期のものに比定出来る。

(b) 軒平瓦 (九片)

これには二種ある。

① 隔壁内に補強材として用いられた一片だけで、約三分の一を残す均正唐草文の破片である。幅、厚さとも次の②のものより小さく、厚さは六cmである。外区の周縁は八mmの素文。珠文帯の幅一cmで珠文は小さく数も多い。界線は外区の周縁下をめぐるものと内外区を分つものとの二線があり、その各四頂点を線でむすんで珠文帯を四分している。内区の幅は二・二cmで、唐草文は②に比して繊細な感が強く、顎の張りは弱く、奈良時代末のものに近い。

② ①の他はみな同范で、復原出来るものもある。幅二九・五cm。厚さ八・五cm。周縁の幅一・二cmで素文。珠文帯の幅一・三cmで珠文数二四個。珠文はやや大きく径六mm、高さ五mmで長辺に一個、短辺には長辺端のものを含めて三個、その間隔は二・六cm。内外区を分つ界線は、外区へ突き抜けている部分があり、この特徴によって同范を確認した。唐草文は、C字型が相対する中央の左右が細部で少々異なり均正にはならず、唐草の先端は分岐している。全体に線はやや太く純い趣を呈する。顎の張りは強い。平安宮跡出土の瓦に類似し、平安時代初期のものである。

(B) 土師器

土師器の器形は、壺と皿の二種で、壺には丸底と圈台付のものがある。すべて薄手のもので淡い黄褐色を呈している。土師器

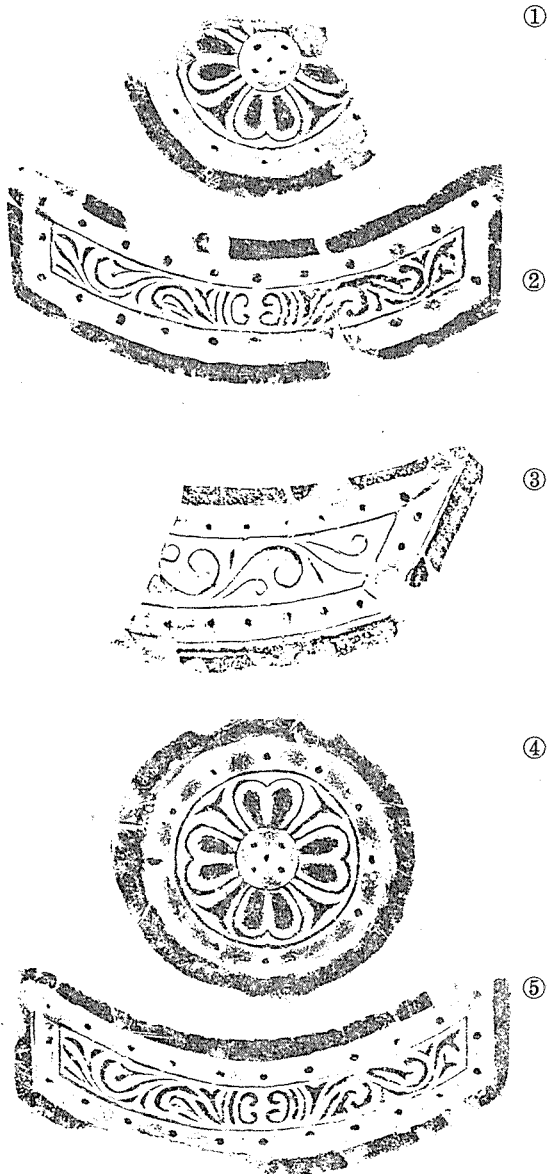


図9 ①②③ 奥海印寺瓦窯出土  
④⑤ 深草中学校校庭出土

がこの窯で焼かれたものであるかどうかということについては、これらの土師器とロストル上面との間に五〜一〇cmの土をかんでおり、焙道溝内にはこの種の土器片が一片も見当らなかつたことを考え合わせると、この窯を放棄する際、あるいは放棄してあまり時のへだたらぬうちに焼成室内に遺棄されたもので、ロストル上面に位置し、あたかもこの窯で焼いたもののごとき観を呈して

いると考えられる（口絵六）。

(a) 壺

完形のもの二個。口縁部径二〇cm。短い口縁部は強く外反する。腹部は半球形で、径一八cm、縦にたたき目の跡が残る。丸底で器高は一四cm。全体に淡い黄褐色で、器壁の厚さ約〇・六cmである。圈台付壺は壺部が細かく破損しており詳らかでないが、圈台の

径は九cmで、色調は先きの壺に同じ。

(b)  
Ⅲ

径一三cmのものから一七cmのものまで三種類の大きさがある。

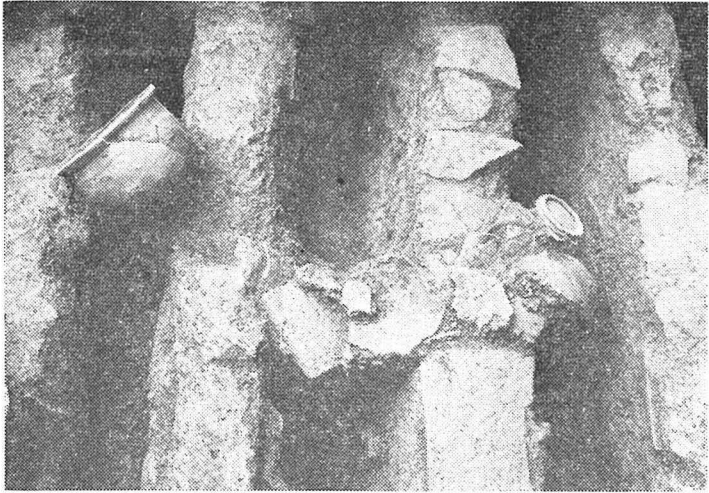


図10 土師器出土状態

これらが二ヶ所にそれぞれ重なり合って出土している。いずれも壺と同様淡い黄褐色で薄手のものである。高さは大体二cmで、台はついていない。

### V むすび

むすびとして、この瓦窯跡の発掘調査によって得た注目すべき点について触れておきたい。

はじめに述べたように、この瓦窯跡のある地は海印寺の寺域内と推定されることから、調査前よりこの窯で焼かれた瓦は海印寺へ供給したものではないかと考えていた。今度の調査の結果、この窯出土の瓦が平安時代初期のものであり、海印寺の創建と時を同じくしている点から、海印寺の瓦を焼いた可能性は強い。しかし、この点については、未だ海印寺の発掘調査が行なわれておらず、また付近より瓦が採集されていないため、将来海印寺出土の瓦との照合をもって解明されるであろう。また地元の人によると、かつては付近で瓦窯跡らしいものが二、三破壊されたということであるから、この付近に教基の瓦窯が存在していた可能性も強い。

次に、この窯の構造についてみると、二層の地山を穿って全体の構築プランを定め、各部分、特に焼成室内の各部分は堅固な下

底面をあらかじめ畝状に掘り、奥壁に接するロストル端においては小突起を掘り残してロストルの高さを規定している。燃焼室は残念ながらほとんど失なわれていたが、焼成室同様地山を穿って両側壁にあてている。これらの点からみて、地山の土質や層行を良く知り、周到に準備された設計があったことを知り得たのである。また両室間の強い焔をうける隔壁は、地山を利用した三方の堅い壁に匹敵する堅固さが要求され入念な構築過程をたどったことをよく示していた。

これらの構造を同年春京都府教育委員会が発掘調査した乙訓郡長岡町の旧乙訓寺の二基の平窯（瓦窯）の構造と比較してみると、境内の平窯は、焼成室・燃焼室及び隔壁を共に堅い地山を穿ってそのまま利用して構築しており、ロストルを構成する瓦の最下段は完形の丸瓦を使用し、また奥壁に接するところには横方向に通じる焔孔を設けている。

もう一基の平窯は燃焼室は失なわれているが、焼成室両側壁は、平瓦を平積みにし粘土を塗付して壁面を構築している。両窯とも奈良時代末から平安時代初期と推定されており、奥海印寺瓦窯と时期的にも近いにもかかわらず、その窯構造は部分的にかなり異なっている。

このように时期的、距離的にかなり接近した平窯においても、

仔細に検討することにより、瓦窯間にいくつかの構造上の相違があることを知りえたのである。

次に遺物についてみると、出土した文様瓦については、この窯の年代決定の基準となった軒丸瓦・軒平瓦があったが、軒平瓦のうち隔壁中より出土した均正唐草文の一片が燃焼室出土のものよりわずかに古い趣きを呈するという興味深い事実を示した。

さらに瓦について最も興味深い点は、この窯より出土した軒瓦に酷似した瓦が、京都市伏見区伊達町の深草中学校校庭より出土していることを木村捷三郎・宇佐晋一両氏より教示されたことである。後にこの窯出土の瓦と比較してみたところ、深草中学校校庭出土の瓦は、この窯の瓦とまったく同范であることを確認した。深草中学の辺たりは、貞観十六年（八七四）に壮大な堂宇を建立した貞観寺の存在した地にあたり、この窯で使用された瓦范でつくられた瓦が貞観寺にも用いられていたことを示すものである。しかし深草中学校出土の瓦は、その質及び焼成の度合が奥海印寺瓦窯出土のものとはかなり異なっていることから、おそらく焼いた窯を異にしていたものと思われる。

出土品でまったく予期しなかったものに土師器がある。この土師器類にこの窯とさしたる差のない年代を与えることが可能であるならば、壺と皿とのセットを有する平安時代初期の土器と文様

瓦との組み合わせという興味ある問題を提供したのである。

奈良時代より平安時代にかけて洛内外に数多くの寺院が建立されたが、宮殿造営も含めて、それらにともない京の周辺の地に瓦窯も多く営まれ、この西山地区には奥海印寺をはじめ乙訓寺・物集女の瓦窯跡が、また東山地区には大宅廃寺・小栗栖・法琳寺の諸瓦窯跡、北には西賀茂・幡枝・北白川の諸瓦窯跡が、それぞれ教基のグループをなして存在することが知られている。しかし、調査されたものがそれらの数に比して少なく、多くは破壊消滅し、又現在も尚破壊されつつあるから、奥海印寺瓦窯の発掘調査はこの点においても重要な意義をもつものであろう。

最後に、今回の発掘調査に際して多大な御協力をいただいた土地所有者安井専次氏、種々の便宜及び助言をいただいた中山修一氏、小林清氏、木村捷三郎氏、宇佐晋一氏、小山喜平氏、発掘期間中いろいろ御厄介をおかけしたタキイ河陽農場梅原文雄氏はじめ職員の方々、伴野正和氏、それに京都府文化財保護課大石良材氏、発掘の端緒を提供された広瀬滋氏に対し感謝の意を表する。

① 京都市立美術大学陶芸科小山喜平氏の御教示による。

② 京都府教育委員会『京都府文化財調査報告』一九六七年

吉本 堯 俊 京都大学研修員  
桑山 正 進 京都大学大学院学生  
中村 徹 也 京都大学聴講生